第６課　律法の言葉を読む

【暗唱聖句】

「彼らは神の律法の書を翻訳し、意味を明らかにしながら読み上げたので、人々はその朗読を理解した」ネヘミヤ8：8

【日曜日・人々が集まる】

「民は皆、水の門の前にある広場に集まって一人の人のようになった。彼らは書記官エズラに主がイスラエルに授けられたモーセの律法の書を持って来るように求めた。祭司エズラは律法を会衆の前に持って来た。そこには男も女も聞いて理解することのできる年齢に達した者は皆いた。第七の月の一日のことであった」ネヘ8:1，2

ユダの人々が城壁の建設を終え、エルサレムの中に引っ越すと、ラッパの祭りがある第七の月の一日に民たちは皆広場に集まって一人の人のようになったとあります。彼らが一つになっていたことがわかります。そして彼れが求めたのは、エズラにモーセの律法の書を朗読してもらうことでした。都エルサレムでの新しい生活を始めるにあたって神様の言葉を求めたのでした。モーセはかつてこう言いました。

「主の選ばれる場所にあなたの神、主の御顔を拝するために全イスラエルが集まるとき、あなたはこの律法を全イスラエルの前で読み聞かせねばならない。民を、男も女も子供も、町のうちに寄留する者も集めなさい。彼らが聞いて学び、あなたたちの神、主を畏れ、この律法の言葉をすべて忠実に守るためで」す（申命記31:11，12）。

聖書の中に記された神の言葉を学ぶとき、人は神様を畏れるようになるのです。

【月曜日・律法を読み、聞く】

エズラが読んだモーセの律法の書（トーラー）とは、創世記から申命記までのモーセ5書と呼ばれる箇所のことです。そこには律法はもちろんですが、天地創造から始まり、イスラエルの民の歴史が記録されていました。彼らは自分たちの祖先が歩んできた道を再確認することで、これから歩むべき道や目標を見失わないようにする必要があったのでした。このことは、一人一人に帰属意識やアイデンティティーを与えました。また、民たちは突然、律法の書を読んでほしいと思ったのではなく、エズラがエルサレムに帰還してから13年、繰り返し学びつづけてきたことの結果として、このけじめのときにもう一度読んでほしいと願ったものと思われます。そして、御言葉に書かれていることが、自分たちの身に起こっていくことの感動と喜びがあったのでしょう。

「彼は水の門の前にある広場に居並ぶ男女、理解することのできる年齢に達した者に向かって、夜明けから正午までそれを読み上げた。民は皆、その律法の書に耳を傾けた」ネヘミヤ記8章 3節

夜明けから正午まで、かなりの時間にわたって聖書が読み上げられたことがわかります。「イスラエルよ。今、わたしが教える掟と法を忠実に行いなさい。そうすればあなたたちは命を得、あなたたちの先祖の神、主が与えられる土地に入って、それを得ることができるであろう」（申命記4章 1節）とあるように、命と土地を得て安心して生きていくためには、掟と法を忠実に行うことが重要であり、そのためにも、まず聖書を読む必要があるのです。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」（マタイによる福音書17章5節）と父なる神が言われたように、聖書に書かれた言葉を聞くことは神様が私たちに求めていることです。

【火曜日・御言葉を読み、説明する】

ネヘミヤ記8：4～8にかけて、どのように聖書が朗読されたのか描かれています。まず書記官エズラが、このために用意された木の壇の上に立ち、その両側に13人の男たちが立ち、朗読の手助けをします。聖書の巻物は大きく重かったので、手助けが必要だったと考えられます。エズラは人々より高い所にいたので、皆が見守る形で聖書を開きます。すると、それに合わせて民は皆、立ち上がるのです。そして、エズラが大いなる神、主をたたえると、民は皆、両手を挙げて、「アーメン、アーメン」と唱和し、ひざまずき、顔を地に伏せて主を礼拝しました。現在の聖書朗読では考えられないほどの厳粛さが伝わってきます。次に、他の13人の男たちが律法の書を翻訳し、意味を明らかにしながら読み上げていきます。その間、民は再び立ち上がり、長年バビロンにいたためにヘブル語がわからない人でも、朗読されている言葉の意味を理解することができました。大勢の民がいたので、13人の通訳者たちは、動きながら通訳した言葉を朗読していったのかもしれません。

新約聖書にも、ガザへ下る道中、エチオピアの女王カンダケの高官が聖書の意味が分からずにいると、そこに天使に導かれてフィリポが解き明かし、バプテスマを授ける場面が出てきます。聖書は自分で読んでいくものですが、解き明かしが必要なこともたくさんあります。

【水曜日・民の応答】

「総督ネヘミヤと、祭司であり書記官であるエズラは、律法の説明に当たったレビ人と共に、民全員に言った。「今日は、あなたたちの神、主にささげられた聖なる日だ。嘆いたり、泣いたりしてはならない。」民は皆、律法の言葉を聞いて泣いていた」ネヘミヤ記8章 9節

律法の言葉が読み上げられたとき、それを聞いて民たちは皆泣いたとあります。これは神様の聖さに対して自分たちのあまりにも罪深いことを痛感させられたことと、それにもかかわらず神様が愛して下さり、町を再建してくださった憐みに感極まったのでしょう。しかし、ネヘミヤとエズラは嘆いたり、泣いたりしてはならないと言いました。それは「今日は主にささげられた聖なる日だから」です。

「彼らは更に言った。「行って良い肉を食べ、甘い飲み物を飲みなさい。その備えのない者には、それを分け与えてやりなさい。今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。」ネヘミヤ記8章 10節

罪を嘆き悲しむことは大切なことです。しかし、嘆き悲しんでばかりでは人は変わることができません。「主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である」とあるように、罪を赦し愛して下さる主に感謝し、それを喜び祝うとき、わたしたちは大きな力を得、変えられていくのです。

【木曜日・主を喜び祝うこと】

「こうして捕囚の地から帰った人々から成る会衆は、皆で仮庵を作り、そこで過ごした。ヌンの子ヨシュアの時代からこの日まで、イスラエルの人々がこのような祝いを行ったことはなかった。それは、まことに大きな喜びの祝いであった」ネヘミヤ記8章 17節

翌日、すべての民の家長たちは、祭司、レビ人と共に書記官エズラのもとに集まり、さらに律法の言葉を深く学びます。その結果、レビ記23章39～43に書かれてある通り、第七の月の祭りの期間を仮庵で過ごさなければならないことを知り、そこ書に書かれてある通り、オリーブの枝やミルトスの枝、なつめやしの枝、その他の葉の多い木の枝を取って広場に仮庵を作って、その中で過ごしました。このような祝いを行ったことがなく、本当に大きな喜びに包まれました。聖書に書かれてある通りを実践することは、神の民にとって喜びなのです。